二次元ぷち文庫

表紙イラスト汗 大杉和馬

転生天使

試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『転生天使』に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

転生天使

大杉和馬
表紙／汗

二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

ルシフェル

優しすぎるが故に人を滅ぼそうとする神の意に逆らい、天界より堕とされた偉大にして高貴な至高の天使。そしてその転生体。

空が夕焼けでもないのに真っ赤に燃えている。巻き上がった黒煙が雲一つない空を不気味に汚し、木霊する悲鳴と破壊音、街は死の気配に満ちていた。

「はっ……はっ……はっ……」

かつて人と車の流れに溢れていた大通り。だが今や残骸と化し炎上する高級車、もの言わぬ骸と化した人々が横たわる死の道路を二人の兄妹が疲労に喘ぎ、よろめきながらも走っていた。時折轟き渡る爆音と震動が焼け溶けたアスファルトの路面と、兄妹の恐怖を激しく揺さぶった。

「はぁ、はぁ、はぁ、お、兄……ちゃん。怖いよ……もう走れないよぉ……」

特に妹の方の疲労は限界に達していた。兄に手を引かれながら辛うじて歩いているといった感じの幼い少女、将来の楽しみな可愛らしい面持ちは、しかし恐怖と疲労に歪み、涙と煤に無残に汚されてしまっている。

「馬鹿、何弱気になってんだよ!!」

兄は弱気になる妹を必死になって叱咤する。泣きたいのは、疲れているのはこの幼い兄とて同じだった。だが自分が泣いてしまえば、張り詰めていたものが切れてしまう。きっと、座り込んでもう一歩も進めなくなる。

そんな確信にも似た予感が少年に泣くことを禁じさせていた。妹を絶対に護り抜くという責任感と、妹に対する想いがこの幼い少年の最後の緊張の糸を、ギリギリで繋ぎとめて

いる。ここで倒れるわけにはいかない。自分たちを、この街を襲った脅威の存在はまだ確実にこの付近に居るのだから……。

「はっ……はっ……はっ……」

だがそれももう限界だった。いくら酸素を取り込もうとも、肺はさらなる空気を求め、心臓は破れそうなほど激しく鼓動を叩いている。両脚はどんなに急かしてもその速度は普段歩くよりもさらに遅い。幼い兄妹の命運は今にも尽きようとしていた。

もう無理だ。もう動けない。肺が、心臓が、筋肉が、盛んに休息の勧告と不満を自分の主人にがなり立てる。もう何もかもが限界だった。少年の体力も、気力も、兄妹の命運とともに今まさに尽きようとしていた。

「君たち、こっちよ」

そんな時だった。呼びかけとともに建物の陰から伸びた手が少年の腕を握り、力強く引き寄せる。もとより限界に近かった兄妹の体力ではその力に抗うことはできなかった。

「……え……？」

倒れ込むように引き寄せられた兄妹の身体が、優しく暖かいものに包み込まれる。半ば朦朧とした少年が自分を受け止めた存在を仰ぎ見た。

トクン……ッ。

小さく胸が鳴る。焼け焦げた鉄と肉の異臭さえ吹き払うような涼風が呼びこまれ、艶を

帯びた長い黒髪が少年の頬を優しく擽る。破れそうなほどに激しく鼓動を叩いていた心臓さえ、ゆっくりとその過ぎた乱動を収めていった。

建物の陰に兄妹を匿い、その両腕に抱きしめている存在。それはあまりにも美しい一人の女性だった。その透き通るような白磁の肌は、禍々しい紅蓮が生む陰影さえ貶めることはできない。切れ長の瞳に、形良い鼻立ち、桜色も鮮やかな唇はきりりと結ばれ、その一つ一つが何とも理想的に美しき部品(パーツ)たち。それらが完璧な調和の元に人間離れした美貌を形成していた。

「大丈夫だった……？」

凛と奏でられる鈴の如く可憐な声が、死の恐怖と絶望に擦り切れた兄妹の心さえ優しく癒やす。ともすれば冷たく映る筈の完璧すぎる美貌を、母性さえ感じさせる慈愛に満ちた表情が優しげに飾っていた。

「そう、よく頑張ったね」

見知らぬ大人を警戒するには、死の蔓延する廃墟の逃避行は少年たちに厳しすぎた。疑心暗鬼に陥るには女性の笑顔は優しくまぶしすぎた。

「ヒッ、ヒック……ヒック……うあぁぁぁん!!」

長い、長い、絶望と恐怖に満ちた孤独な彷徨の末にようやく見つけた保護者の存在は、我慢に我慢を重ねていた二人の兄妹の涙の堰を決壊させるには十分過ぎた。

それでも女性の身体にしがみつき、泣き叫ぶ妹に対し、押し殺した嗚咽にとどめ、気丈に一人立つのは少年のプライドと妹への責任感なのだろう。そんな幼い兄の柔らかな髪を、全てを察したように女性の優しい掌がそっと撫でつけていた。

＊＊＊

「……ママ……」

幼い少女が涙の涸れきらぬ寝顔で小さく呟いた。今や、三人となった逃亡者たちが燃え盛る街を走る。少年はちらりと自分の手を引き、妹をその背に負って走る女性を見上げた。

子供の目にも彼女は美しい女性だった。年齢は二十歳に達したかどうか、女性にしては長身の背丈、細くしなやかな手、すらりと長く伸びる両脚には無駄な贅肉一つ付いていない。しかし女性特有の丸みを帯びた肢体の柔らかさ、醸し出す清純な色香はまだ幼い少年でもドキドキしてしまう。

清楚なワンピースに包まれた胸は、たわわな果実を結んで白い布地をはち切れんばかりに押し上げる。紫のタイトなスカートは細い腰のラインから想像もできないボリュームある美尻の曲線を強調していた。清楚な可憐さと大人の色香とが奇跡のようなバランスで同居し、まさに黄金律とも呼べるほど完璧な均整のとれた肢体を構成している。

「……大丈夫？」

女性に手を引かれ、彼女の背中で眠ってしまった妹を見つめる少年の様子にそっと女性

が囁く。少年が疲れ、自分もおぶさりたがっていると勘違いしたのだろう。その黒曜石のように輝く黒の瞳に、心配そうな光が浮かんでいた。

「だ、大丈夫だよ。お姉ちゃん」

見惚れ、じっと見つめていたことに気付かれ、少年は顔を赤らめると思わず強い口調で言い返す。疲労は大きく、すぐにでも楽になりたい欲求はあったが、この華奢な女性に自分たち二人を背負って駆ける体力があるとは思えなかった。幼いながらも男としてのプライドが、女性や妹を前に甘えることを良しとしない。

ブンブンと小さな首を勢いよく振る兄の手を女性はそっと握りしめると、廃墟と化した街の裏通りを足早に走り抜ける。

（……ひどい……）

無残な街並みを見やり、女性の美貌が悲しみと悔しさに僅かに歪む。死体の焼けるいやな臭いが辺りには充満し、倒壊したビルや家屋から死した人の無念と怨嗟の声が聞こえてきそうだ。

艶やかに輝く桜色の唇を噛みしめ、自身の無力さとこの悲劇を生み出した存在（もの）への怒りにその黒曜石のような瞳を煌めかせる。

それにしても不思議な女性だった。少年たちより年上であるとは言え、か弱い女の身でありながらこの惨状に怯えもせず、この廃墟を作り出しただろう存在への恐怖もその表情

わになる。

ミカエルだけでなく、幾万もの天使が、眼下の人間までもが思わず息を呑んだ。重力にさえ逆らい微塵も型崩れない張りのある紡錘型、黄金比で讃えられるほどに肢体との調和のとれた大きさとバストラインの美しさが嫌でも視線を惹きつける。輝くような肌の白さが僅かに恥じらい紅潮した薔薇色を際立たせ、朱色の蕾が頂に美しく息づいていた。

「……っ!!」

恥じらいに頬を染め、動揺したのは一瞬、それでも揺るぎない意志と正義感が顔を背けることさえせずに、陵虐に猛る天使を見据えた。両手を拘束され、身動きが取れないとは言え、神の手による造形の極みとも言える双峰を隠す素振りさえ見せない。

「ルシフェル様……」

そんなルシフェルの態度を無視し、ミカエルは赫怒に身を焦がしていたのが幻だったかのように、穏やかな顔で天使の美峰へと頬を寄せる。まるで幼子が母親に甘えるような表情、しかしその手つきはいやらしくルシフェルの胸の上を這い、揉み、まさぐっていた。

「うっ、くっ……やめなさい。ミカエル。正気に戻って……」

「僕は正気ですよ。ルシフェル様……ずっと、ずっとこうなることを夢見ていた」

狂気と妄執を宿した翡翠の瞳に見据えられ、恐怖とは違うおぞましさに背筋が凍る。

ゾワリと、不意に胸から甘い愉悦が背筋を這い上った。ミカエルの怖ろしく手慣れた手

サンプル 試読 SSRS

つき、女と言う者を知り尽くした手管。人と言う種が誕生する前から存在し、ほぼ全ての女天使の羨望と思慕を集めたこの天使の、色の技巧も知識も如何に熟練しようと人間ごときのそれとは次元が違う。

僅か一撫でで肌がカッと熱くなる。やんわりとその掌が胸のふくらみを揉みあげると、腰の奥がグツリと煮えたぎるのを感じた。何より神代の時代より純潔を守り続けてきたルシフェルにとって、それはあまりに未知の領域だった。

「愛しています。ルシフェル様……」

「くっ……も、もうやめなさい。こんな……こと……」

自分に対する歪んだ愛を恍惚とした表情で語るミカエルに、激しい怒りと悲しみを覚える。吐き気を催すほどにおぞましい妄執、その腰には腰布を押しのけて天を衝く雄々しい男性器が、欲望と期待にその血を漲らせながらヒクヒクと戦慄いていた。

（これが……こんなものが……私と……？）

鈴口から垂れ落ちる先走りの液が白衣にシミを作り、青臭い精臭が湧きたっている。その野太い茎の逞しさと、熱気さえ感じるほどに滾る欲望、それでいながら芸術品のような美しささえ感じる陽根だった。

天を衝き、猛々しく反り返る性器視線が吸い寄せられる。向きあうように磔にされる自分と、この天使の間にそそり立ち、欲望にヒクつくそこから黒曜の瞳は目を離せない。高

なる浅ましい期待に我知らず喉が鳴り、生唾を呑み込んでいた。

「あ……っ!!」

乱暴に下着をはぎ取られたルシフェルの脚の間に、火傷しそうなほどに燃え上がる怒張が押し当てられる。他者に触れられるどころか、見られることさえ恥ずかしい秘密の花園に、男の性器が触れたのだ。

「さすがはルシフェル様、これは、これは、本当にお美しい」

白衣のスカートの中を覗きこまれ、異性の前に曝け出された最後の聖域に、周囲の天使からもいくつもの嘆息の声が響き渡った。ルシフェルの芸術品とも呼べる左右対称に美しく整えられた処女丘に、ふっくらと柔らかげな花びらが飾り、漆黒の若草の茂みが覆っている。その上にチョコンと息づく桜色の真珠がキラキラと輝き、その女性器の全てが思わず見とれてしまうほどに美しい煌めきと色香を放っていた。

「なっ、このやめなさい!! そんなところを見ないで……あっ、くっ、あくぅあああぁ〜〜〜〜ぁっ!!!」

見られ、触れられる嫌悪と羞恥、怒りと悔しさは不意に訪れた激感を前に砕け散った。ミカエルの手にはいつ取り出したのか、銀色に輝く小瓶が乗せられている。天使はその瓶の中身、酷くトロミのある液体を剥き出しにされたルシフェルの秘唇に垂らしたのだ。

性器に直接強酸でも浴びせられたかのような灼熱感が、敏感な粘膜を焼き尽くしていく。

ザクザクと針が刺さるような痛み混じりの刺激もあるが、何より直接神経を灼かれるような焦熱地獄が敏感な部分を責め苛み、甲高い悲鳴を絞り取られた。
「ふぁぅっ、くひっ、な……なに、何を……っ、何をしたのです⁉」
「ルシフェル様の苦痛を取り去ってくれる天界のお薬です。ご心配なく害はありませんよ」
媚薬などを使いながらぬけぬけと笑うミカエルを非難することもできない。息さえできない苦悶に十字架の上で大きく身を捩る。強酸に焼かれる熱感とひりつく痛みが神経を蝕み、額に浮かんだ珠のような汗が滑らかな頬を幾筋も滑り落ちた。性器に押し当てられた肉棒から先走る粘液がヴァギナに塗り込められたのだと気付く余裕もない。
「はっ、こんな熱っ、熱い……はぁ……んんっ‼」
「苦しいですか？　お辛いですか？　フフフッ、大丈夫ですよぉ。じきにそれが忘れられなくなりますからね……クスクスクス」
ウリエルの嘲笑に怒りを燃やす余裕もない。火傷に酷似した熱さと痛みに、責め苛まれ続ける堕天使は、いつしか自分の肉体に起き始めた変化に気付かなかった。
両手の指が虚空を掻き、喉の渇きにも似た感覚に、薔薇色の唇が幾度も切なげに喘ぐ。焦れったいような、酷く物足りないような焦燥感に、腰がもどかしげに小さく揺れていた。ミカエルの両手に抱えられ、開かれたまま固定された両脚の太股がピクピクと痙攣し、火がついたように火照る秘唇は何かを欲するようにヒクついている。

「きゃあああっ、あっ、ひっ、うくぁああ――――っ!!!」

絶叫、当然のように動き出す肉棒に、ルシフェルには似合わぬ金属質の悲鳴が放たれた。スマタよろしく燃え猛る肉棒にゾロリと剥き出しの処女丘を舐め上げられ、腰が夥しい激感に跳ね上がる。逞しい量感と欲望で煮えたぎる熱感、狂気じみた妄執が一体となって、ルシフェルの無垢なヴァギナを荒々しく責め立てた。

媚毒によって倍化された鋭すぎる官能の槍が、快楽に目覚め始めたとは言え未熟すぎる天使長の性感に突き刺さる。風が撫でるだけで感じるほどに研ぎ澄まされた粘膜を、陰毛と肉茎でヤスリがけなどされては、神経中枢が過剰な快楽情報に焼き切れ、性感のオーバーヒートを引き起こした。

シュッシュッシュッ……。

だが、ミカエルは彼女が感じる苦痛の割合が大きいと知るや、その動きを変化させる。肉棒の表面が触れるか触れないか、まるで筆先や羽毛で擽るような優しげな淫撫が、虐痛に痛めつけられた粘膜を可愛がった。敏感な箇所を襲う擽り責めがもたらす喜悦に幾度も腰を揺すり、くすぐったさに身を捩る。痛みは薄れ、代わりに心地よい愉悦が腰の奥深くから湧き上がった。

（あ……くっ……アソコが痺れ……はっ、こ、こんな……こと……）

だがルシフェルにとって激痛に打ちのめされ、苦悶に苛まれていた方が何倍もマシだっ

たろう。痛みや屈辱なら怒りに心を燃やし反抗することもできる。だが、優しく甘やかな、それでいてねちっこい肉責めは潔癖な天使長の抵抗心さえ蕩かしていった。

「あ、あん……ふぁ……だ、だめ……いつまでもそんなところばかり……あはぁっ!!」

苦虐と悲鳴だけが支配していた陵辱空間に天使の甘い快楽の吐息が混じり始める。官能に溺れ始めた肉体は力の足りない責めにもどかしささえ感じ、疼く腰が切なげに震えた。

暴力性のない責めに怒りと屈辱は霞み、焦れったい痺れが閉じることもできない両膝をもじつかせる。さらに粘膜から浸透した媚毒は、血流にのって既に心身の隅々まで回りきり、いつしかルシフェルの白磁の肌を艶やかな薔薇色へと染め上げていった。ただでさえ敏感な箇所が、神経が剥き出しにされたと錯覚するほどに感度が研ぎ澄まされ、肌に触れる空気さえ愉悦の針を突き刺していく。

ニチュ、クチュ、ヌチュ……。

(こんな私……濡れて……いや、いやぁ……こんあ、こんなこと……てぇ)

いつしか両脚の間から小さく響く淫らの蜜音、酷く粘ついた音の間隔が徐々に早く、そのボリュームを大きくしていく。男の陰毛に甘い蜜液が絡みつき、しっとりと濡れた黒毛が光を反射してテラテラと淫らに輝いた。鼓膜を震わせるその淫らな音に、嫌でも突きつけられる事実を前にルシフェルは震える眦から悔し涙を零すまいと唇を噛みしめる。

「準備はよろしいようですね……ふふふ、さあミカエル。愛しのルシフェル様を思う存分

「そ、そんな……う、嘘ですっ⁉　そんなのって……あっ、いやっ‼　いやあぁッ‼‼」

地獄のような苦痛が消えるのは嬉しい。だが何も知らない彼女はそれが性の交わりの与える悦楽によるものだと言う事実に気付き潔癖な心が悲鳴を上げる。このように無理矢理、処女を奪われ、その直後にもう自分は感じ始めていると言うのだろうか？

その感覚を否定しようと必死になって首を振る。激しい首の動きに星屑をちりばめたような黒と金が混じりあった髪が左右に舞い、肌に弾かれた涙と汗が周囲に飛び散った。だがそんな心が上げる悲痛な叫びを無視し、苦痛に責め苛まれていた肉体は快楽を選択してしまう。

後から後から溢れ始める蜜液に滑りを良くした肉棒がさらに鋭く、力強くルシフェルを責め立て、そのたびに加速する肉の悦びを前にさらに少女の心と身体が追い詰められていった。

（こ、こんな……こんな……こんなことって……わたし……）

力強く膣襞を抉られ、殴打するように子宮口を肉塊で蓋されるたびに紅蓮の火柱が捕らわれの天使の肉体を下から上へと突き上げる。あまりに逞しい陽根、雄々しい抽挿、何より粘膜越しに感じる自分に対する怨念じみた妄執が凄まじい。無理矢理こじ開けられた女体の中枢を、被虐が生み出す快楽の激情が焼き尽くしていった。

「だから、無理ですって。耐えられるわけないんだから、ね、溺れちゃいましょ？」

お試し読み

「あっ、あっ、あぐぅっ、やあああっ、そんな……そんなのだ、だめぇぇぇぇぇぇぇぇぇ〜〜〜〜ッ!!」
喉も裂けよと絶叫を迸らせる。子宮が張り裂けるのではないかと錯覚するほどの衝撃が、ルシフェルの膣全体を地鳴りのように震わせた。
ミカエルのそれは単純なテクニックと言うわけではない。天使の肉棒から放たれる黄金のオーラ、天使の力そのものが堕天使の肉体へ粘膜を通して侵入する。真っ赤に腫れた粘膜を無数の刷毛で優しく可愛がられているような、硬いブラシでざわめく媚襞ごと膣が焼き切るほどに掻き毟られているような、異質な法悦が子宮を内側から吹き飛ばすような勢いで炸裂した。
(いや……守らないと、守りたいの……あの子たちを……だから……だから……だからぁ!!)
望まず天使へと戻されることよりも、陵辱され汚されることよりも、自分が自分でなくなりあの兄妹を護る存在が居なくなる恐怖こそがルシフェルを怯えさせていた。
それは彼女の中に初めて生まれた感情だった。全てに等しく注がれる慈愛や全てを護りたいと願う博愛が生んだ想いではなく、ルシフェル個人の感情が育んだ愛情だった。忘れかけていた希望と感動を与えてくれた兄妹を何としても護りたいと言う極めて個人的で、それでもなお清く美しい想いだった。

だが、そんな儚い願いさえも、腰のひと突きごとに全身で落雷を受けているような凄絶なる快楽の破壊槌は押し潰す。桜色の粘膜をミカエルの波動が灼き焦がし、子宮の奥を黄金の光が貫くたびに快楽の電流は、烈しい稲妻の槍と化して神経中枢を駆け回る。脳内では他の全ての感覚を消し去り暴走する洗脳の力に、頭の中の配線がいくつも引き千切られそうになる。

「あっ、あっ、あっ、あくあああァあァァァァァァぁぁぁぁぁぁ〜〜〜〜〜〜ッッ!!」

果て死ぬことを覚悟させる狂おしいほどの絶対快楽の乱打に、ルシフェルの鈴のような声音が幾度も断線し、甲高い悲鳴と甘苦しい嬌声が溶け混じった絶叫を迸らせた。

淫根の返しが膣内を引っ掻くたびに、ルシフェルを呪わしいほど深い快楽の闇へと、のめり狂わせた。

柔らかい肉壺の粘膜を捏ねるように、肉の繊維一本一本を解すように、絶妙と精妙を極めきった肉の色責めを前に偉大なる天使様は、身も世もなく啼き叫ぶ。

「さっ、忘れるのです。人間どものことなど、いえ、すぐにこの僕が忘れさせてあげますよ」

うっすらと、狂気の宿された笑みを浮かべると力強く両の太股を抱え直し、そのまま激情とともに女の中に己のペニスを穿ち込んだ。

震える白い喉を限界まで反らした麗女が、噎せるような汗を振りまきながらその小柄な身体を、上下に激しく揺さぶられる。金色と溶けあった漆黒の髪は、まるで生き物が踊る

ように宙を舞い、女天使の汗と愛液が絡んだ甘い芳香が激しい動きに煽られムッと周囲に立ち込める。

パンパンパン……バッサバッサバッサ……ズッチュズッチュズッチュ……。

（ひ、響いて……ンぁ……おく、奥にくるぅ……きてるぅ。深すぎるの……こんなのって……）

両の太股を逞しい腕で抱えあげられ、その両脚の間で、丈長い純白の天衣は大きく風をはらみ、まるで白旗のように激しく煽られている。その間から力強く響き渡る肉打つ音と粘ついた淫音、隠されている意味がまるでない。むしろその布地の中で繰り広げられている淫卑な情景に想像が掻き立てられた。

（だ、だめ……もう……もうだめぇ……堕ち……堕ちるぅ……堕ちてしまうぅ……）

かつての天使長としての誇りも、淑女としての嗜みも、ルシフェル個人としての矜持さえも無力に堕ちた。ルシフェルを色狂わせるためだけに神の手により調整された肉棒の責めに理性を根こそぎ絡めとられ、抵抗の意思さえ怒涛の如く侵食する悦楽の波濤の中で挫かれていく。まるで型取りするように亀頭の形や肉茎の太さを秘所に徹底的に叩き込まれる。知りたくもない浮き立つ血管からえらの張った返しの味に至るまで、悦びに震える膣肉へと覚えこまされていった。

ミカエルの両腕がルシフェルの背中に回り、息もできないほどきつく抱きしめられる。

ミカエルの硬く逞しい胸板に、額と柔らかな乳房が押しつけられると、躊躇なくその胸に縋るように抱きついた。何かに掴まっていないと意識も肉体もどこかに吹き飛んでしまいそうな恐怖と不安の前では、自分を犯す男に抱きついていると言うのに屈辱さえ湧き起こってこない。

ギッギッギッギッ!!

「あっ、いっ、やっ、もういやああァあぁぁッ!!　かき、掻きまわさないでッ!!　こ、こんなの耐えられない。も、もう……もう私壊れてしまううぅぅ――――――ッ!!!」

宙に磔にされたルシフェルの身体が激しい動きに悲鳴を上げ、悲痛な天使の懇願が絶叫となって空と街に反響する。無数の天使と生き残りの人間たちが見つめる中、二人の美しい天使たちの交わりはその激しさと勢いを増していった。

『お姉ちゃん、頑張って――――――ッ!!』

水晶球の中から喉よ張り裂けよとばかりに声をからして自分を応援する兄妹、だがそんな懸命な声は届かず、その姿さえも、今のルシフェルには大切な存在に、自分のはしたない痴態を見られているというマゾヒスティックな悦びを喚起させるだけだった。

「ごめ、ごめんな……さい。わ、私……私……も、もう……」

壊れてしまう。肉体ではなく心が壊れる。既にルシフェルの肉体には破瓜の痛みや、男根に射抜かれている苦悶は影さえないのだから……。肉茎と亀頭で掻き擦られ真っ赤に爛

れた粘膜から泡立つ本気汁が止め処なく吐き出され、竿に張り巡らされた血管や鈴口がGスポットを引っ掻くたびに膣を焼き切るような深い愉悦に溺れ、果てなき絶頂へとまた飛ばされてしまう。

白い爪先を掌に喰い込ませ、額をミカエルの胸板に強く押しつけたまま、泣きつく子供のように首を勢いよく振った。指針のまるでない真っ黒な嵐の海の中でそれだけが縋るべき確かな存在、揺るがない雄々しい肉体に全てを委ね、自身は何もかも忘れこの肉悦の海で溺れてしまいたい。

涙で濡れ乱れた美貌を仰がされ、その桜色の唇をまたも奪われた。塞がれる唇に出口を封じられ、行き場を失った声と衝撃が上下からぶつかりあい、肉の内側で激しく火花を散らす。

「んグむぅんんんっんんっンンン〜〜〜〜〜〜〜〜ッ!!!!」

舌が差し入れられても、それに積極的に自分も絡めてしまう。あっという間に口の中いっぱいに広がる快楽と唾液の味、熱く心地よい接吻に舌が口内でドロドロに溶けてしまうような錯覚にさえ陥った。

唇から打ち下ろされ、子宮から突き上げられる異種の法悦の板挟みにされ、どこにも逃げられない快楽が増幅しあいながら全身を悦びの波紋となって伝播する。

「ンあぁぁぁぁッッ!!!　やあぁんっ、す、凄い……凄いぃぃぃ!!　こ、こんな……こんな

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/